はしがき

本報告書は、神戸大学大学院国際文化学研究科付属異文化研究交流センター（Intercultural Research Center, 通称 IReC【アイレック】）の 2009 年度研究部プロジェクト「ヨーロッパにおける多民族共存とＥＵ——多民族共存への多視点的・メタ視点的アプローチ——」の活動をもとに編集したものである。

このプロジェクトの概要は、以下の通りである。

(1) プロジェクト名：ヨーロッパにおける多民族共存とＥＵ
——多民族共存への多視点的・メタ視点的アプローチ——

(2) 代表者：石川達夫（地域文化論講座）

(3) 分担者：三浦伸夫（異文化コミュニケーション論講座）
藤野一夫（現代文化論講座）
岩本和子（現代文化論講座）
坂井一成（異文化コミュニケーション論講座）
寺尾智史（地域文化論講座）
松井真之介（異文化研究交流センター地域連携研究員）

(4) プロジェクトの目的

国際化・グローバリゼーションがますます進展し、国家を超えた人・物・情報の移動・交錯・交流が激しくなってきている今日の世界において、多民族共存の問題に取り組む上で最も必要とされることの一つは、多民族共存の複雑な現象を、一つの民族に同一化した一つの視点ではなく、複数の民族の複数の視点から見ていく多視点的アプローチであり、さらにそれら複数の視点を何らかの意味で統合しうるようなメタ視点的アプローチであろう。

この点で、ヨーロッパは歴史的に多民族が複雑に葛藤と融和を繰り返しつつ共存してきた地域として、豊富な事例を提供している。また現代の EU は、「多様性における統一」を基本理念として掲げ、近代国民国家の原理に制限を加えながら、加盟国すべての国語の公用語化やマイノリティの保護など、様々な先進的で興味深い試みを行っている。

したがって、今年度のプロジェクトは、昨年度のプロジェクト「多言語・多民族共存と文化的多様性の維持に関する国際的・歴史的比較研究」を踏まえつつ、ヨーロッパに焦点を当てて、ヨーロッパにおける多民族共存の諸問題について欧州評議会やＥＵなどの理念・政策と絡めて研究を進め、多民族共存への多視点的・メタ視点的アプローチの確立をめざす。

(5) プロジェクトの必要性

多民族共存の問題をめぐって、今日特に重要な課題として浮かび上がってきているのは、異なる諸民族が同じ場所に「共存」はしていても、必ずしも十分な「相互理解」はしておらず、そのために互いの主張・立場・視点が噛み合わず、折り合わず、したがって十分な「相互理解」に基づいた平和的な「共生」のための条件が整っていないこと、そのためにひとたびテロや経済危機などが起こると、昨日までの隣人が途端に不気味で異質な「異邦人」と化してしまい、そこに思いもかけない民族的軋轢や衝突が発生するという問題である。

これは、いわゆる「多文化主義」の重大な欠陥としても指摘されている点である。即ち、「多文化主義」を標榜するオランダなどの国において諸民族集団が互いに干渉し合わない「自由」の中で相互理解を欠いたまま孤立的に自分たちの社会を築いてしまう「柱状化現象」が問題にされ、さらには、現代の精神疾患として増えている「解離性同一性障害＝多重人格」は「歩く多文化主義」（大澤真幸）だとして、社会のレベルでの「柱状化」した「多文化主義」は個人のレベルでの統合的人格を欠いた「解離性同一性障害」に対応するものとして問題にされている。

このような問題に取り組む上でまず必要なのは、多民族共存への多視点的・メタ視点的アプローチであろう。即ち、アプローチする者は、共存する複数の諸民族集団それぞれの主張・立場・視点を――どれか一つに自己同一化することを極力避けつつ――まず「多視点的」に理解するように努め、その上でそれらの主張・立場・視点を鳥瞰し、それらを噛み合わせ、折り合わせ、対話させうるような「メタ視点」を獲得するように努めることである。もちろん、このような「メタ視点」の獲得は極めて困難であろうが、しかしそれなしには「解離性同一性障害」的「多文化主義」の問題の克服もありえないであろう。

また、具体的な問題に照らし合わせてみても、例えばチェコにおけるドイツ人－チェコ人－ユダヤ人－ロマ人、ベルギーにおけるオランダ語系住民－フランス語系住民－ドイツ語系住民、フランスにおけるフランス系住民－アルメニア系住民－イスラーム系住民など、複数の主張・立場・視点が対峙してきた場において、実際に多視点的・メタ視点的アプローチが試みられ、ある程度の成果も上げていると言える。

そして様々な先進的な理念と政策を掲げてきた欧州評議会やＥＵは、ヨーロッパの多様な諸民族の主張・立場・視点を鳥瞰し、それらを噛み合わせ、折り合わせ、対話させうるような「メタ視点」を作りだし、ヨーロッパの多様な民族的諸「人格」を統合する「メタ人格」に多少ともなりつつあると言えるかもしれず、少なくともその注目すべき試みであると言えよう。それ故に、欧州評議会や EU の理念と政策を検討することも必要である。

(6) プロジェクトの活動計画

本研究は、国際化・グローバリゼーションがますます進展する今日の世界において、近代国民国家の原理に規定された排他的な自言語・自文化中心主義の限界を自覚しつつ、多

民族の平和的共存のためには何が必要かを探求する前提として、多民族共存の場において生じる現象を一つの視点からだけではなく複数の視点から解読しつつ統合する多視点的・メタ視点的アプローチの確立をめざす。

その際、具体的なフィールドとして、歴史的に多民族が複雑に葛藤と融和を繰り返しつつ共存してきたヨーロッパを取り上げてその具体的な事例を分析し、また、「多様性における統一」を基本理念として掲げて様々な先進的試みを行ってきたEUに注目する。

したがって、本プロジェクトの活動としては、まず各メンバーが以下の研究活動を進める。

1. ヨーロッパにおける実際の多民族共存の場とそこで生じてきた諸問題について、通時的ないし共時的に、歴史と現状を分析する。
2. 欧州評議会やＥＵ、さらにヨーロッパ各国や国連が、多民族共存、マイノリティと少数言語保護のために、いかなる理念を掲げ、いかなる政策を実施してきたかを分析する。
3. こうして、ヨーロッパの具体的な現実に即して、いかにして多民族共存への多視点的・メタ視点的アプローチが確立されうるかを考究する。

さらに、以上の課題をめぐって外部から研究者を招いて講演会・シンポジウム・セミナーなどを開催する。

そして、最終的なまとめとして、各研究員の研究成果と講演会・シンポジウム・セミナーなどの成果を研究報告書にまとめて、異文化研究交流センターのホームページ上で公開する。

2009年度に本プロジェクト主催で行った講演会およびセミナーは、以下の通りである。

1. 講演会：2009年12月11日（金）
   演題：「欧州の活性化——EU地域の重要性とフランダースの実情」
   講師：ベルナルド・カトリッセ（ベルギーフランドル交流センター館長）

2. 講演会：2010年1月25日（月）
   演題：「ヨーロッパ統合の深層——政治・宗教・文化」
   講師：ジル・フェラギュ（西パリ大学ナンテール／ラ・デファンス准教授）

3. 連続セミナー
   第1回　2010年2月15日（月）
   坂井一成「ヨーロッパにおける多文化共生」
   岩本和子「『ベルギー文学』の射程——民族意識とフランス語とオランダ語と」

第 2 回　2010 年 2 月 23 日（火）
寺尾智史「少数言語保全と言語記述の複数性――表記のゆれか、多様性のあらわれか」
三浦伸夫「エスペラント運動と多民族共存思想」

第 3 回　2010 年 3 月 2 日（火）
松井真之介「オスマン帝国の 1915 年アルメニア人ジェノサイドにおけるフランス国家の認知問題――EU、トルコ、フランス」
石川達夫「チェコ国歌に潜んでいた矛盾――両大戦間チェコスロヴァキアの民族問題」

本プロジェクトの活動を通して、ヨーロッパにおける多民族共存とＥＵについて知見を深めることができただけでなく、EU と関わりの深い外国人研究者・活動家とも交流を深めることができた。また、講演会とセミナーには国際文化学研究科のみならず、他研究科や学外から参加者を集めることができた。特に学生・院生には、通常の授業では得られない貴重な研鑽の機会を提供することができたと確信する。

以下に、今年度のプロジェクトの活動と成果を公刊する。今年度の研究活動を、今後とも何らかの形で発展させていきたい。

石川 達夫（神戸大学大学院国際文化学研究科教授・
異文化研究交流センター研究部長）